「女子短大生の同性友人グループとの関わりにおける自己の個別性のあり方 - アイ メージ画を用いた検討 -」
へのコメントに対するリプライ

三好 智子1

A Reply to Kushizaki's and Kokugan's Comments on “An Examination of Individuality of Self in the Relationship with Female Informal Group in Women’s Junior College Students —A Study Using Image Drawing—”

Tomoko MIYOSHI1

本稿は拙論「女子短大生の同性友人グループとの関わりにおける自己の個別性のあり方 - アイ メージ画を用いた検討 -」（三好，2002）に対する串崎（2003）, 郵紳（2003）の意見論文を受けてのリプライ論文である。意見論文をご執筆下さった両氏に、まずは心より感謝申し上げたい。本稿では両氏のご指摘頂いた問題点や今後の課題について、現時点で可能な限り、説明と意見を述べたいと思う。

研究の方向性について

はじめに、三好（2002）は、女子の同性友人グループをめぐる個人の排除などのグループ力動は、個々の自己形成の営みと関連して生じているのではないかとの問題意識から、これらの関連性の検討を目的として実施した調査（三好，1998）の一部を、個別性のあり方という観点から再度分析し直す形で作成されたものである。三好（2002）で記述した研究目的に対し串崎氏より、筆者の本来的な関心は、青年期女子の個別性発達の様相について何らかの仮説や提言を導き出すことに対わったのではないか、とご指摘を受けた。筆者の関心については串崎氏のご推察の通りであるが、扱った素材が上述の経緯で収集されたものであるため、三好（2002）の作成にあたっては、本文中で記述した探索的な目的に留めるのが適切と考えた。今回両氏には、三好（2002）と関連していくつかの調査方法をご提案頂いている。いずれも有益な方法と思われるので、今後の参考にさせて頂きたい。

調査方法について

まず、調査対象者に女子短大生を選択した点については、国際式より、同性友人グループが密着的で自他一体的な特質をもつのは青年期前期であり、青年期中・後期にあたる短大生を対象とするには疑問がある、とのご指摘を受けた。本文中でレビューしたため詳細は割愛するが、山本（1989），落合・佐藤（1996）からの知見から、自己と友人関係のあり方には、高校から大学の時期を
転換期として相互作用的変化が生じることが推測される。従って三好 (2002) の調査対象者の選択は、こうした発達的転換期における個別性の様々な位相を捉えるという主旨に、基本的には沿うものではないかと考えている。しかし三好 (2002) では、上述した発達的変化の様相を加味した上で、充分な考察が行われているとはいえ難い。國眼氏のご指摘は、一つにはこうした不充分さをつくものではないかと考えた。

また國眼氏には、友人同士が様々な授業時にイメージ画を実施することは、反応を当たり障りのないものにしてしまうのではないか、また、面接調査の一部を集団で行うことは、面接での語りに集団の力が働く可能性を否定できないのではないか、とのご指摘も受けており、筆者もご指摘の通りと考える。ただし後者に関する方法論上の見直しには、若干の検討の余地があるように思える。本文中では取り上げなかったが、ある集団面接では、その場にいない友人への悪感情が語られる展開が見受けられた。こうした展開は、まさに集団としての力が働いた結果と考えられる。しかし、不和を潜在するがゆえに、一人で面接場面に来ることは、メンバーに対するあらゆる対人関係の誤り行為となる可能性があり、関係を損なわないためにも友人を伴う必要があったのではないかとも考えられる。従ってこうした場合、その場で敢えて個別面接に分けることは、面接方法の統制という意味では有意義かもしれないが、必ずしも面接場面への積極的な関与につながらないのではないだろうか。また、同じく本文中では検討しなかったが、友人と一緒に・という形で了承を得たケースが一件見受けられた。個別面接に限定した場合、こうしたケースを拾い上げることができず、調査対象者の特性に偏りが生じることが懸念される。もちろん依頼に応じるか否かには、調査対象者の特性だけでなく調査者が調査対象者に与える印象をも関与しており、その点ですでに偏りが生じるのであるが、女子の同性友人グループをテーマとする面接調査には上述のような難しさがあると筆者は考えるが、少なくとも集団面接の内容を分析に含めるのであれば、その語りがどのような文脈から生じたものであるのかを、より細かく吟味する必要があったと思われる。

さらに國眼氏は、4年制女子学生を対象とした自らの調査経験から、多くの学生が流動的な所属形態をとっていることを挙げ、教示の際に場面や関わりの時期の指定を行った方がよいのではないかと述べている。これについてはまず、三好 (2002) と國眼氏の調査対象者の違いが考慮される必要があると思われる。三好 (2002) の調査対象者の場合、基本的にクラス単位で授業を受けており、専攻の性質上グループ単位の実習が多く、学内のサークル活動もそれほど活発には行われていない。従って少なくとも学生生活においては、國眼氏の調査対象者よりも、固定的なグループが形成されやすい状況にあることが推測される。また三好 (2002) の調査対象者の場合、女子のみの短大で入学している点、専攻科目として従来女性の性役割として認知される傾向の強い内容を選択している点などの特性から、同性関係に一定の親和性を推測することもある程度可能ではないかと思われる。また、この年齢の場合、確かに所属形態が流動的であることが考えられるが、だからといって場面を特定すると、場面によっては異なる関わりの一貫しだけ捉えることができないのではないかだろうか。またこの年齢では、「女子の同性友人グループ」をある程度抽象化して捉えていることとも考えられるため、場面を特定しないことで、こうした抽象的イメージが表現されることをねらったという側面もある。ただしこの場合、具体的場面を描くものと抽象的イメージを描くものとの違いを吟味する必要がある。國眼氏のご指摘からは外れる部分もあると思われるが、イメージ画の場面設定の問題と共に、検討の不十分なこの問題に再検討の必要性を感じた。

分析の枠組みと個別性の捉え方について

まず選択のよう、三好 (2002) で抽出した2つの枠組みで個別性のあり方を捉えることが、「間
題意識に基づいてイメージ画を分析する最適な方法であったか」とのご指摘を受けた。そもそも女子の同性友人グループに関する実証研究が少ないこと、また、女子の同性友人グループとの関わりをテーマとしたイメージ画の研究が見受けられないことから、枠組み抽出の土台となるイメージ画の分類基準の設定、分析作業における最も大きな問題点の一つとなった。描画という多義的な解釈の成り立つ表現手法の分析に根本的な恣意性がつきまとうことは、つとに指摘される。すなわち、描き手が分離・個別化のどのステージにあるのかについてあまり注目されていないような印象を持った」と述べ、また女性の場合、集団との関わりにおける個別性発達の様相が多様であると筆者の見解（三好、2000）を引用し、枠組み抽出にあたっては、発達的な視点と多様性の視点という2つの視点が必要ではないかと指摘している。これには筆者も同感である。ただし、これは三好（2002）でも今一つ明確化されていない部分であるが、発達的な視点を導入する際、女性の個別性を一方向的な分離が個別性的視点のみで捉えてよいのかという問題が生ずる。女性同一性は他との分離や個別の独立に根ざしているのではなく、原初的親密性、一体的関係の世界に基礎をもつとの見方（斎藤、1990）や、個として立つことが歓迎されない文化的土壌についての指摘（河合、1976）を踏まえると、西欧で概念化された分離個体化のあり様は、場合によっては孤立を表すことも考えられるからである。従って、発達的な視点を導入する上では、個の分化の水準だけでなく、自己の基盤となる関係性の質を吟味することが必要であり、また、多様性の視点を導入する上では、多様性を従来的な分離個体化的バリエーションと捉えるのではなく、女性における個別性とはどういったあり方なのかを問うことが必要ではないかと考えられる。

また園眼氏より、「個-個」と「個-グループ」が「個別に描かれ、同定あり」として一括りにされているが、これらの個別性的自覚のあり様は異なるのではないか、とのご指摘を頂いた。このご指摘は、①の下位類型も含めた「①一③の類型が、発達的な視点・多様性の視点においてどのように位置づけられるのか、という問題を喚起するものではないかと筆者は考えた。現時点での見方を述べると、「②関係の重なりとして描かれ同定あり」は、発達的な視点で捉えられるのではないかと思われるが、「①個別に描かれ、同定あり」の下位類型「個-個」と「③個別に描かれ、同定なし」双方向の一部は、多様性の視点で捉えられる可能性があるのではないかと筆者は考えている。なぜならこれは、個別性のあり方には違いがあるものの、双方ともに、特定の群で親密な関係を築きながらも、グループにとらわれない他者との関わりが生じていることが伺えるからである。これと関連して、「グループとの出入り（矢印）があるか、グループの囲いはどれほど強固であるか」という外部の接点着めにする園眼氏の見方、特に前者においてまことに的を射たものと感じた。

ただ、後者は関連して、個別性を獲得した場合には「グループという枠組みは消えてしまったり、ほんのうすらとしか残っていないかもしれない」という園眼氏の記述は、個の分離の側面にやや重視を置きすぎているように筆者には感じられた。特定の他者と深い関係を結ぶことは、他との関係とはその質において差異が生じる。こうした特定の他者との関係は、青年期期・中期のグループとは質が異なるだろうが、やはりそれなりの輪として感じられるのではないかだろうか。特定の他者と深い関係をもつながらもそれにとらわれることなく、また、他者がもっている特定の関係に疎外感を感じることなく、他者関係をもつというあり方がより現実的であるように筆者には感じられる。先に引用した女性同一性に関する斎藤の見方を踏まえると、こうした点はいったん見逃せないとところではないだろうか。園眼氏の記述の一部を取り上げ筆者なりの見方を述べたが、個別性発達を自他の「二律背反を安心して生きられ
「三好氏は、個人差を考慮した個別的な対面訪問を基にした方法を提案し、その効果を検討している。特に、個別差を考慮した訪問の方が、共感と理解を深め、対象者の共感を促進する効果があると指摘している。この方法は、個別性の高い対象者に対し、共感を深めるために有効であると考えられる。

また、個別性を考慮した方法は、特に青年期の個別性を考慮した方法が注目されている。個別性を考慮した方法は、共感と理解を深め、対象者の共感を促進する効果があると指摘している。この方法は、個別性の高い対象者に対し、共感を深めるために有効であると考えられる。

一方で、個別性を考慮した方法は、特に青年期の個別性を考慮した方法が注目されている。個別性を考慮した方法は、共感と理解を深め、対象者の共感を促進する効果があると指摘している。この方法は、個別性の高い対象者に対し、共感を深めるために有効であると考えられる。
疑問を呈している。しかし、見過ごしがちな言葉間違いや失敗に心理的意味を見出したことこそ、精神分析の貢献したところではないだろうか。ただし、この種の意味づけには、面接での語りと充分に照らし合わせるなどの、慎重な吟味が必要であることを、改めて確認したところもある。

女性固有の個別性について

三好（2002）で可能性として提示した「女性固有の個別性感覚」（Eさんのケース）について、串崎氏より、三好（2002）では男性のイメージ画が収集されておらず、「Eさんのようなあり方が本当に女性固有であるのかについては慎重に考えていく必要がある」との指摘を受けた。異質と捉えられる者と何らかの関係をもつことは、他の「二律背反を安心して生きられる」という意味で、個別性発達における重要な指標となると考えられるが、Eさんの場合が同じ女性というつながりとして意識されている点が筆者には興味深く思われた。現時点での見方を述べると、これまでの依存的対象関係から離脱し、独立した自己のあり様を模索する青年期の自己発達過程において、青年期前・中期の同性友人関係は、「チャム」概念（Sullivan, 1953）にも示唆されるように、相互に自己を確認しあい支えあうような、発達上の基盤としての意味をもっていることが考えられる。そして特に性的発達著しいこの時期においてこうした基盤は、女性の場合には特に女性性の受け入れという心理的作業に少なからず寄与していると考えられる。この自己の性の受け入れという心理的作業の質が男女で異なり、女性の場合、より身体性に関わる質のもので、発達的に骨格としての重みをもっていることは、臨床的観点から様々に指摘のあるところであろう（笠原，1977 ほか）。こうした観点からすれば、女性性の受け入れが一層落する青年期中期以降には、こうした基盤といかに関わりながら、もしくは基盤の質の変容といかに相携え合いながら、個別性を成立させゆくかが問題となってくるところかと思われる。

Eさんのケースには、同性別のつながりに深く根ざしきつ、これと調和する形で分化を遂げつつゆくような個別性のあり方が垣間見えるように感じられた。こうしたあり方が女性固有のものであるかは充分に検討される必要があるが、しかし仮に男性の同性関係に同じ男性というつながりが認められたらとしても、それが男性と等価なものであるとは必ずしも言えないのではないか。

また、串崎氏には「同性友人グループが体現する個性の性のイメージ」とはいかなるものか、筆者が性別をどのように考えているかを明らかにする必要があるのではないか、とのご指摘も受けていいる。このご指摘には、稿を変えて論じられるべき本質的な問いが含まれており、残念ながら現時点では本論の範囲内で簡潔に述べるべきをもたないため、説明は控えたいと思う。今後の課題とさせて頂きたい。

最後に

串崎・國眼両氏には、拙著の問題点や課題だけでなく、筆者の関心全般に関わる大変貴重なご指摘・ご示唆を頂いた。どのテーマにも言えることであるが、そもそも個別性や女性の同性関係をどのように捉えるかという点に、研究者の発達観・人間観が反映されることを改めて感じて感じる機会でもあった。また、串崎氏には、イメージ画や面接といった手法を扱う上での筆者の苦心にも言及して頂き、力づけられた思いである。本論は筆者のに力不足とし、両氏の細やかなご指摘に対し充分に妥当性のある説明や意見を述べるには残念ながら至っておらない。両氏の意見論文は今後も折に触れで振り返ることになると思っている。

引用文献

笠原 嘉 1977 青年期．中央公論新社．
河合隼雄 1976 母性社会日本の病理．中央公論社．
三好智子 2003 女子短大生の同性友人グループとの関わりにおける自己の個別性のある方—イメージ画を用いた検討— へのコメント.NII-Electronic Library Service


斎藤久美子 1990 青年期後期と若い成人期女性を中心として.鍼干八郎他（編）臨床心理学体系 3 ライフサイクル.金子書房.


山本里花 1989 「自己」の二面性に関する研究—青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討—.教育心理学研究, 37, 302-311.

（2003年8月7日受稿, 2003年9月5日受理）